

英語句動詞 *come across* についての考察

——認知言語学の観点から

岡 良 和

〈キーワード〉

① come across ② 認知言語学 ③ 直示

〈論文要旨〉

英語句動詞 *come across* には「(偶然) 出くわす」という意味がある。この意味においては *come* が本来有している「移動」という意味特性が希薄になっている。本論文では、場所や時に関する直示語である *here* と *now* が有する特性をもとに、*come* との意味的關係を明らかにすることで、*come across* の意味拡張プロセスをたどることを目的とする。

A Study of “Come across”: From the Viewpoint of Cognitive Linguistics

Yoshikazu OKA

〈Key words〉

① come across ② cognitive linguistics ③ deixis

〈Abstract〉

The phrasal verb “come across” means “to meet, find, or discover, esp. by chance.” It is deserving to study the reason why this phrasal verb has come to have this meaning. The present paper aims to clarify the semantic features of “come across” from the viewpoint of cognitive linguistics and shows that deictic features of “here and now” are closely related with the deictic verb “come.”

英語句動詞 *come across* についての考察

——認知言語学の観点から

岡 良 和

はじめに

英語句動詞 *come across* には「(偶然) 出くわす」という意味がある。この句動詞は中学生や高校生も習得すべきものの一つである。しかしながら、*come across* の説明においては *come* が本来有している移動動詞としての性質が希薄になっていることが看過されているという現状がある。

本論文では、場所や時の「直示語」と *come* との関係から、*come across* の意味拡張プロセスをたどり、英語学習にも寄与することを目的とする。

1. 中学校や高等学校の英単語集における *come across* の扱い

Come across は、*come from*、*come out*、*come down* などと同様に中学校や高校の英単語集にも掲載されている句動詞の 1 つであるが、*come* を含んだ他の句動詞と異なり、構成する語の意味を合成することにより全体の句動詞の意味になるわけではない。*Come across* は、英和辞典と英英辞典に以下 (1a-b) のように示されている。

- (1) a. ***come across*** [自] (1) S 〈(普段見かけない) 人・物〉に (偶然) 出くわす, 会う, …を見つける

Where did you ~ across these rare stamps?

(その珍しい切手はどこで見つけたのですか。)

—『ジーニアス英和大辞典』(s.v. *come across*) (下線筆者)

- b. ***come across*** sthg. / sbdy. to meet, find, or discover, esp. by chance

— *LDCE* (s.v. *come across*) (下線筆者)

中学生を対象とする下記 (2) の英単語集では *come* に関して次の記載がある。

- (2) *come* [kʌm] : 来る 話をしている人、聞いている人を中心に考えて、そこへ向かうことを表す。

—『高校入試 実戦合格英単語』(2006 : 5)

この次に *come* を含む 11 種類の熟語が挙げられているが、そのひとつである *come across* は以下 (3) のように記載されている。

(3) come across : 偶然出会う

・ I came across this photo here.

(私はここでこの写真を偶然見つけた。)

—『高校入試 実戦合格英単語』(2006 : 5) (下線筆者)

また、高校生を対象とした以下 (4) の英単語集では、come は次のように記載されている。

(4) **come** は、話し手の方へ、または話題の中心となる方へ向かう動きを表す。(go とは対照的な動きである。)

—『データベース 1700 使える英単語・熟語』(2008 : 51)

そして、この単語集では come across は、以下 (5) のように記載されている。

(5) I've never come across anyone like her.

(これまで彼女のような人に出会ったことはない。)

—『データベース 1700 使える英単語・熟語』(2008 : 51) (下線筆者)

come across は中学生や高校生にも必要とされる基本的な句動詞の一つである。しかしながら、なぜ come across は「偶然出会う」という意味を持つのが上記 (3) および (5) における記述では不明である。

2. Come across の基本義

Come across の基本義としての用法は以下 (1a-b) である。

(1) a. He came across the street to where I stood.

(彼は通りを横切って私が立っているところへ来た。)

b. She came across the street on the run.

(彼女は走って通りを横切って来た。)

—『英和活用大辞典』(s.v. come v. 〈+前置詞〉) (下線・和訳筆者)

上記 (1a-b) では、いずれも主語の指示物が、話し手がいる場所へ移動する事象が表示されているため、上記 1. (2) (以下 (2) として再掲) により説明できる。

(2) come [kʌm] : **来る** 話をしている人、聞いている人を中心に考えて、そこへ向かうことを表す。

—『高校入試 実戦合格英単語』(2006 : 5)

Come across には、話し手や聞き手のいる場所への主語の指示物の移動が見られるのに対して、go には話し手や聞き手のいる場所から主語の指示物が離れて行く方向への移動が見られる。以下 (3a-c) がその事例である。

- (3) a. This is where the old ferry used to go across.

(ここは昔古いフェリーボートが往復していたところだ。)

- b. go across the ocean

(海洋を越える)

—『英和活用大辞典』(s.v. go² v.) (下線筆者)

- c. go across [over] a *bridge*

(橋を渡って行く)

—『英和活用大辞典』(s.v. bridge¹ n.) (下線筆者)

話し手が存在する場所は、いわば、自己の「縄張り」と認識される。上記 (1a-b) のように、この「縄張り」の内部に移動してくる場合には、自己に何らかの影響を及ぼすと考えられ、逆に、上記 (3a-c) のように、「縄張り」から離れて行く場合には、自己に影響を及ぼすことがなくなると考えられる。

3. Come across における「偶然性」

「偶然」について、九鬼 (2012) では以下 (1) のように述べられている。

- (1) 偶然は遭遇または邂逅として定義される。偶然の「偶」は双、対、並、合の意である。「遇」と同義で遇うことを意味している。偶数とは一と一とが遇って二となることを基礎とした数である。偶然の偶は偶坐の偶、配偶の偶である。偶然性の核心的意味は「甲は甲である」という同一律の必然性を否定する甲と乙との邂逅である。我々は偶然性を定義して「独立なる二元の邂逅」ということができるであろう。

— 九鬼 (2012 : 132-133) (下線筆者)

そして、この邂逅には「理由性」「因果性」「目的性」が欠如していることが挙げられる。九鬼 (2012) では、このことについて、以下 (2) のように述べられている。

- (2) 偶然を表す言葉のうちで、否定語を契機として有する「ゆくりなく」、「端なくも」、「不図」などはいずれもみな理由性または因果性または目的性の否定に成立の基礎をもっているものである。「ゆくりなく」は「縁なく」すなわち「縁由なく」の義であるからおそらく理由性の否定であろう。「端なくも」の端は首始、いとぐちのことであるから、「原因なく」というように因果性を否定したものと見てよいであろう。「不図」は当字であるかもしれないが「不

意と」と関係あると考え得る限り、目的性の否定と見て差支えないであろう。

九鬼（2012：71）

「偶然」の出会いを表示する come across も、「理由性」「因果性」「目的性」を欠如したものであることは、以下（3a-b）で示すことができる。

- (3) a. He came across the street to where I stood as I had expected.

（思ったとおり、彼は通りを渡り私が立っているところへやってきた。）

- b. *I came across him as I had expected.

（思ったとおり、私は彼に偶然出会った。）

「理由性」「因果性」「目的性」が欠如していると「不思議」や「驚異」を覚える。このことについて九鬼（2012）では以下（4）のように述べられている。

- (4) 偶然性に当価する感情はいかなる感情か。「奇遇」「奇縁」などの語の存在が示すごとく、偶然性の感情当価は驚異の情緒である。必然性が平穏という沈静的感情を有つのは、問題が分析的明晰をもって「既に」解決されているからである。それに反して偶然性が驚異という興奮的感情をそそるのは問題が未解決のままに「眼前に」投出されるからである。驚異の情緒は偶然性の時間的性格たる現在性に基いている。要するに、必然はその過去の決定的確証性のために、弛緩および沈静の静的な弱い感情より有たないが、可能および偶然は問題性のために、緊張および興奮の動的な強い感情を齎すのである。

九鬼（2012：234-235）

以上、偶然性について挙げられた「独立なる二元の邂逅」、「理由性または因果性または目的性の否定」、「驚異の情緒」の実例として以下（5）を分析する。

- (5) 〈状況〉：Morissot が通りを歩いている時に、昔の釣り友達の Sauvage に偶然会う。

As soon as the two friends had recognized each other they shook hands warmly, feeling quite emotional over the fact that they had come across each other in such different circumstances.

（二人の友人はお互いを認めるとすぐに暖かく握手をし、こんなにも異った境遇で偶然出会った事にとっても感激した。）

— *The Dark Side* (1990：34)（下線・和訳筆者）

上記（5）においては、二人の遭遇には、事前に会う目的があったわけでもなく、会うことに理由も因果も認められない。また、下線にも示されているとおり、驚きの念が見られる。

4. Across の基本義

Across は以下 (1) のような意味の変遷を経ている。

- (1) **across** adv. **1** ((?a1200 *Ancrene Riwe*)) 交差して. **2**((c1325))横切って. **3**((1559)) 曲がって, 誤って. cf. Shak. *AWW* 2. 1. 67. ◆ME *acrois* □ AF *an croiz* (F *encroix*) ← *an in*, from (< L *in* 'IN') + *croiz* 'cross'. — prep. **1** ((1590-91 Shak. *2H6* 4. 1. 115)) …を横断して. **2** ((1634)) …の向こう側に.

— 寺澤 (編) (1999 : 12) (下線筆者)

Ashore、afire、aboard などと同様に、across は cross に “in” や “from” の意を持つ “an” が前置されることで構成されている。語源辞典では a- が以下 (2) のように記載されている。

- (2) a- pref. ‘on’ の意を表す. ◆late OE *a-* ← OE *an* (prep.) ‘at, ON’. ◇名詞に付加されて述語的形容詞および副詞を形成する : *abed*, *alive*, *aright*, *asleep*, *asunder*, *across*, *afoot*.

— 寺澤 (編) (1999 : 1) (下線筆者)

つまり、強勢がない接頭辞 on- は a- に弱形化することから、ashore、afire、aboard はそれぞれ *on shore*、*on fire*、*on board* から生じたと考えられる。これらの語と同様に、across は *on cross* であったと考えられるが、前置詞 on は OE から 15C までは、in や into の意でも使われていたことが以下 (3) の記載で示される。したがって、上記 (1) の下線部の記述と上記 (2) の下線部の記述は矛盾するものではない。

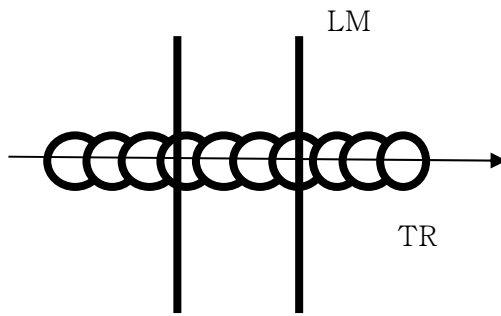
- (3) **on** prep. **1** ((OE)) [位置] … (の) 上に, …の方向に. † **2** ((OE)) – ((15C)) …の中に (in, into).

— 寺澤 (編) (1999 : 988)

そして上記 (1) における **1** の「交差」概念が **2** の「横断」概念につながることで「移動の軌跡」を表示する意が現れ、移動の直示動詞 come と共起するようになったと考えられる。上記 **2**. (1a-b) (以下 (4a-b) として再掲) の事象は、Langacker (1990) の表示に従うと以下 (5) のように図示できる。

- (4) a. He came across the street to where I stood.
b. She came across the street on the run.

(5)



— Langacker (1990 : 18)

上記 (5) において、移動する具体物であるトラジェクター (TR) の指示物、つまり上記 (4a-b) における he や she の指示物が、参照となる枠組みであるランドマーク (LM) の指示物、つまり the street の指示物を「横切って話し手の方へ移動する」概念が示されている。

5. 「因果系列」の交差

Across の物理的な意味から、「遭遇」に関わる抽象的な意味へと考察を進める。二つ以上のものの出会いの事象に因果性が認められない場合に、偶然と言われる。九鬼は以下 (1) のように述べている。

- (1) たとえば、屋根から瓦が落ちてきて、軒下を転がっていたゴム風船に当って破裂させたとするならば、我々はそれを偶然と考える。…瓦は屋根の朽廃による固着の喪失か、風力による離脱の促進か、何らかの原因があって、その結果として、落下の法則に従って一定の場所へ落ちた。ゴム風船は最初に受けた微小の衝動とゴムの弾性と風船の球形と地面の傾斜凹凸とが原因となって、その結果として、運動の法則に従って一定の場所へ転がってきた。因果系列を異にする二つの事象が一定の積極的關係に置かれたことを偶然というのである。

— 九鬼 (2012 : 122) (下線筆者)

ここで、因果系列と物理的系列とを区別しておく必要がある。以下 (2) では静止した物理物を偶然見つける事象が、come across で表示されている。

- (2) 〈状況〉：知っている人物についての記事を偶然見つける。

I recently came across the following item in the papers:

(最近、私は、以下の新聞記事を偶然見つけた。)

— *The Dark Side* (1990 : 79) (下線・和訳筆者)

上記 (2) において、新聞記事は静止しているので、二者の動線が物理的に交差することはない。しかしながら、上記 (2) における新聞記事がこの場所に存在し、見つけられるまでの因果系列と、主語の指示物がこの記事を見つけるまでの因果系列が交差したことにより、「偶然見つける」という事態が生じたのである。

6. 「遭遇」における時間と空間

遭遇には時間に関係していることについて、九鬼（2012）では以下（1）のように述べられている。

（1）…時間的契機が決定的意味を有している。偶然を「時のはずみ」というのはそのためである。

— 九鬼（2012：139）

そして、上記（1）の例として、周の武王が孟津に至って河を渡った時、白魚が船に躍り入ったこと、また、ある女性が汽車の窓から空き瓶を投げ捨てた時に下から子供の悲鳴が聞こえたような気がしたこと、などが挙げられている。これらの事例は、たとえば、周の武王の船と白魚の二者がそれぞれに独立した因果系列により、ある一定の時に遭遇した事象を表しているものとして見ることができる。

偶然に関する時は「現在」であることについて、九鬼（2012）では以下（2）のように述べられている。

（2）可能性の時間性が未来であり、必然性の時間性が過去であるに反して、偶然性の時間性は「いま」を図式とする現在である。いったい、未来的の可能は現実を通して過去の必然へ推移する。可能は、大なる可能性から不可能性に接する極微の可能性に至るまで、可能の可能性によって現実と成る。現実とは必然へ展開する。そうして一般に、可能が現実面へ出会う場合が広義の偶然である。

— 九鬼（2012：228）（下線筆者）

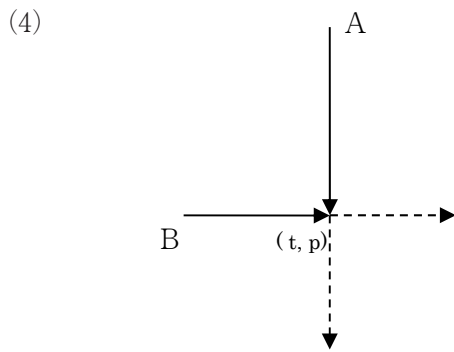
未来は可能性の時間であるため、話し手の縄張りの外にある。過去も過ぎた出来事として、話し手の縄張りの外にある。これらに対して、偶然性の時間性は「いま」であるために話し手の縄張りの中にある。このことから、「偶然出会う」事象には come が使われるのである。

さらに、遭遇がある特定の時に生じることは空間も関係することになる。たとえば、周の武王の逸話では船に白魚が飛び込んできたのは孟津という特定の場所であり、ある女性の逸話の場合には、空き瓶を投げ捨てた時にはその汽車が特定の場所に存在していたのである。これらは、自己の縄張りの内部で生じている事態である。このことについて、九鬼（2012）では以下（3）のように述べられている。

（3）同時性はその本質上、空間性を暗示している。換言すれば勝義の偶然性は二つあるいは二つ以上の因果系列の交叉点に存するもので「ここといま」(hic et nunc) に成立するものである。空間的の「ここ」と時間的の「いま」に限定されているものである。

— 九鬼（2012: 149）（下線筆者）

二つの独立した因果系列の交差概念を時間と空間で示すと以下（4）のようになる。



上記 (4) は A と B のそれぞれの因果系列を単純化して示している。両者が会える時間と地点 (t, p) までの未来時の因果系列は実線の矢印で、また、両者が遭遇した後の因果系列は破線の矢印で示されている。「未来(tの直前まで)」には遭遇が可能ではあるが予想されていない。また、遭遇した後は「過去 (tの直後から)」の事実となる。従って、「偶然」出会うことにより「驚異の情緒」を感じるのは自分の「縄張り」に予想もしない相手が入ってくること、これが言語上の時制からは独立した「現在」と捉えられるのである。

おわりに

本論文では、come across が、「主語の指示物が話し手のいる場所へ向かって移動する」という基本義から「(偶然) 出くわす」という意味になる理由を、場所や時の「直示語」である here (ここ) と now (今) の観点から考えることにより、明らかにすることを試みた。

話し手を中心に考えてみると、話し手の方向へ向かう移動である come、話し手が存在する here (ここ) と now (今) は相互に関連しており、これらが話し手の「縄張り」を構成すると考えられる。この「縄張り」に入ってくることは強い影響を与えることになる。このことにより come across の持つ「偶然性」が here (ここ) と now (今) という要素を運び、「驚異」の念を抱かせることになるのである。

参考文献

- Fujikyoku Shuppansha (ed) (富士教育出版社編) (2006) 『高校入試 実戦合格英単語』 東京：富士教育出版社。
- Ichikawa, S. et al. (eds.) (市川繁治朗他編) (1995) 『英和活用大辞典』 東京：研究社。
- Kirihara Shoten (ed) (桐原書店編) (2008) 『データベース 1700 使える英単語・熟語』 東京：桐原書店。
- Konishi, T. et al. (eds.) (小西友七他編) (2001) 『ジーニアス英和大辞典』 東京：大修館書店。
- Kuki, S. (九鬼周造) (2012) 『偶然性の問題』 東京：岩波書店。
- Langacker, W. (1990) "Subjectification," *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Maupassant, Guy de. (1990) *The Dark Side: Tales of Terror and the Supernatural*. New York: Carroll and Graf Publishers, Inc.
- Summers, D. et al. (eds.) (2001) *Longman Dictionary of Contemporary English (=LDCE)* Edinburgh Gate: Pearson Education Limited.

Terasawa, Y. (ed.) (寺澤芳雄編) (1999) 『英語語源辞典』(縮約版) 東京: 研究社.

岡 良和 人間環境大学教授 (英語コミュニケーション論)